

「インディオ・メスティソ・ラサ：ラテンアメリカにおける人種のカテゴリー再考」

31 de octubre, 2015 Museo Nacional de Etonologia, Suita, Osaka, Japón

池田光穂 (rosaldo@cscd.osaka-u.ac.jp)

■前口上

支配的存在を可視化する

1. 「人種やエスニシティ研究において欠落しているのは、文化人類学において研究対象となってきた人びとから、支配的存在を可視化する名指しについての検討である」。この支配的存在とは、白人性の植民地形態 (colonial forms of whiteness) であり、この場合の白人性の概念とは「白人の身体から遊離している」。(太田好信、2014年11月15日共同研究会趣旨説明、於：民博)
2. 人類学は研究対象を描くことに専心し、研究対象が人類学者やその周辺にいる支配者(例：白人)をどのように可視化し、名指ししてきたのかについての状況に関して無視してきた。
3. また、人類学者は研究対象を描く際に、自らを不可視なものとして透明化し、民族誌の中に登場させてこなかった。
4. それらの非対称性を認識したとしても、あるいは、それらの解釈の違いがポジショナリティにもとづくものであったことが分かったとしても、文化人類学は変わらないかもしれない——誰も未来など予告できないゆえ。
5. だがしかし、それらのポジションが、力関係によって生まれることの認識が不可欠で、「必然」によって搦めとられた観念を解きほぐす歴史化という作業は必要である。(グラムシになぞらえて) この歴史化は「常識」として流布した概念をある歴史状況におけるヘゲモニーの形態として理解すること」をいう(太田 2010:279-280)。

■ラテンアメリカ地域における人種構成と政治の係わりについて (図版)

【01：ホンジュラス時代】

・私は、最初に青年海外協力隊員 (JOCV) でホンジュラスに派遣された。外務省に由来する JICA による国名は、ホンデュラス。コロンブスの発見時にカリブ海側の沖合いは水深が深く (hondo) オンデュラスと呼ばれたことを「派遣前訓練」で学んだ。その「人種構成」——文化人類学を学ぶ人間として「民族構成」と自分自身で読み替えていたかもしれない——は、メスティソ9割、ガリフナ5%、先住民5%からなりたち、先住民はほとんどいないと記されていた。メスティソは、植民者たる白人とインディオとの混血の末裔だと学んだ。先住民 (インディオ) に憧れていた私は、その人たちが (文化的に) 死に絶えつつあることに残念に思った。

・派遣前訓練の事前学習 (国別研究) では、他の国に派遣された協力隊員のレポートを閲覧することができて (もちろん一般公開されていない) 私は、ボリビアに派遣された人類学者の細川 [弘明] 隊員・木村 [秀雄] 隊員の活動記録よりも、同国のクーデターについての生々しい情景描写に心を動かされた。その情景は首都ラパスのものであったが、私には、チェ・ゲバラ

がゲリラ活動中に命を落としたイグエラのものに重なっていた。

・出発前に、ホンジュラスの先住民について、国立民族学博物館で資料を複写した記憶がある。確か、ミスキート、ヒカケ、についての薄い資料があったのみであった。

・ホンジュラス派遣隊員は、それまで事前訓練として、隣国グアテマラのアンティグアという古都で（任国赴任前の）語学訓練を1か月ほど受ける予定になっていた。しかし、私の派遣時期である1984年は、前年8月に大統領であったリオス・モント将軍が、同じくクーデターによりオスカル・メヒア将軍（当時、国防大臣）が就任したこともあり、ホンジュラスでの訓練に切り替わった。アンティグアで語学研修を受けた、先輩隊員たちは、アンティグアの風光明媚さと、先住民文化の豊かさを褒めちぎっていたので、私たちは大変ショックだった。ホンジュラスは、貧しい農業国で、華やかさがなかったからだ。

・ホンジュラスは、レーガン政権期（1981～1989年）では、政治的不安定の巣窟たる中央アメリカ五カ国——中米連邦（República Federal de Centro América, 1823-1839）——中で、コスタリカを除けば、形ばかりの民主制が、米国の軍事援助によりなんとか維持されていた。JOCVの派遣も、日本政府がODAによりホンジュラスの共産化を防ぐ一環だと言われた。当時、ニカラグアにはサンディニスタ政権（1979-1990）があり、米国は、イラン＝コントラ・ネットワークにより米＝ホの特殊部隊が、ホンジュラス領内ミスキート地方からニカラグア領内に越境し反サンディニスタ派のミスキート人に、武器援助や軍事訓練を試みているところであった。他方、私が1985年から87年初頭まで居住していたエルサルバドル国境近くには、ファラブンド・マルティ国民解放戦線（1980-1992年内戦終結により合法政党化）の軍事活動があり、ラジオ Venceremos が夜になると放送しているという状況だった。

・ホンジュラスに住んでみて、レンカ・インディアンが同国の最大の人口をもつ先住民であり、当時、植民地時代に作成された語彙集のみが残り、話者は絶滅寸前であることを知った。フランス系アメリカ人の民族学者アン・チャップマン（Anne Chapman, 1922-2010）の民族誌が公刊されて、首都テグシガルパの数少ない書店で手に入れることができた。Ritos agrarios y tradición oral de los lenkas de Hondurars, Universidad Nacional Autónoma de México, Instituto de Investigaciones Antropológicas (1985); Los hijos de la muerte : el universo mítico de los Tolupan-Jicaques (Honduras), Instituto Nacional de Antropología e Historia (1982).——彼女は、1960年代後半にティエラ・デル・フエゴのオナ系先住民セルクナム（Selk'nam）を調査をしたことで著名だったことは後年に知る。

・私が2年間住んだ西部山地地帯のコパン県のドロレスという町（municipio）の住民は、他者の学問的命名によるメステイーソという人種・民族区分の用語について、ほとんど知らなかった。彼らのアイデンティティの自称は、カンペシーノ／ナ（カンポ [田舎、耕作地] の人）であり、そのほぼ同義である農業従事者（agricultor）だった。ただし、インディオとブランコという他者のカテゴリは存在するが、後者はスペイン植民者の末裔（peninslar, criollo）という歴史認識もない。インディオについては、時にカンペシーノと同義であり、自分たちもインディオだという人があり、レンカ・インディアンの反抗の英雄レンピーラ（ナショナル・ヒーローで通貨単位の名になる）になぞらえて、粗野だが勇敢な男をインディオと呼ぶことがある。ドロレスの住民にとって、インディオは、ある時には国境を越えたところにいるチョルティ——実際には国内にもチョルティを祖先と称する人がいる——に代表される、木綿服のコスチ

ユウムで身を固めた人であり、また別の時には、ステレオタイプ化された地元の同胞カンペシーノであり、さらに、粗野と勇敢さを兼ね備えている男性が具現化した時の綽名や、やや蔑称の意味を含むような男性の呼称であった。

・この町は私が滞在した 100 年を遡らない前くらいに、より南のエルサルバドル国境の県のオコテペケから移住してきた数家族の末裔からなると述懐していた。その出自と言われるオコテペケに接するエルサルバドル西部のサンタ・アナ県およびチャラテナンゴ県先住民は、北方のメキシコ起源のピピル（ないしはナワト）先住民が多数に住む地域であり、伝統的にこの地域の人口圧がホンジュラス領内へと北進する要因になっているのが人口学的な定説である。サッカー戦争ないしは百時間戦争と呼ばれた、1969 年 7 月のエルサルバドル軍の国境侵犯とオコテペケ占領という事態は、サッカーにまつわる国民対立よりも、それに先立つホンジュラス領内の大量のエルサルバドル移民の国外退去命令が背景にあると言われる。

・エルサルバドルのカンペシーノがメソアメリカ全域のインディオと文化的要素を共有していることは、フォークロア的な要素を含めた熱心なカトリック信者であり、また、ソウルフードである肉厚のトルティージャを中心とした食文化への深い愛着にも関係しているようだ。当然トルティージャの原料であるトウモロコシの栽培文化も——グアテマラ西部高地に比べると些か粗放的であるが——豊かである。

・メスティーソのホンジュラス西部農民にとっての他者のエスニック意識について戻ろう。黒人 (negro=文字通り色彩の「黒」そのもの)、サンボ (黒人と先住民の混血)、ムラート (黒人とメスティーソ混血) という、植民者の人種的区分を彼らが峻別したことは、私は知らない。そもそもホンジュラスの海岸部から西部高地まで約 300 キロのコパンの山岳地帯には、黒人の数が極めて少ないからだ。メスティーソからみて、黒人は珍しくて興味の対象になるが、マーケットなどの場において露骨な差別を見たことがない。肌の色も身体的な特徴もさまざまなタイプがあり、労働移動、商業、教育経験を通して、黒人の多い地域での経験もあり肌の色で差別するような伝統がないのだろう。西部山岳地域では、黒人は「料理が上手 (buen cocinero)」という職業的ステレオタイプと結びついており、黒人の話が出てくると、この「人種的な」特殊能力について、誰も異論を挟まないのは、外国人の私でも奇妙に思ったほどである。

・肌の色の白さは、しばしば白人女性の白さや魅力に表象される。他方で、そのような肌も、加齢とともにシワやシミが増すことがあることがあるので、この魅力は常に若さと関連づけられる。白人の少ない地域なので、白人はしばしば、アルビノと同義に言われることがある。アルビノは、太陽の子 (hijo/-ja del sol) であるが、アルビノを白眼視する人はほとんどいない。これは、後に先住民地域において生活した時にも感じたこと。したがって、ホンジュラス西部山地のメスティーソ農民に、白人=植民者というステレオタイプはほとんどみられない。金持ちや支配者は、ドンやパトロンと呼ばれる在住あるいは不在地主で、男性で腹の出た立派な身なりをして、また体格のよい馬やアメリカ製 (ブロンコなどの) 立派なトラックを所有者しているというステレオタイプがある。男性の農民は (牛の所有/非所有にかかわらず) カウボーイとして馬を乗りこなせる技量があるので、ドンやパトロンは、ワンポイントの入った嵩の高い立派なカウボーイハットをかぶっている。このドンの身なりに対する憧れの気持ちは顕著であり、農作業をする時にはボロボロの作業用の防止を着用しているが、祭礼、役所への訪問、タウンミーティングなどの公的な場所に出かける時には、シャワーをあびて、まさにパトロン

の被るような一張羅のカウボーイハットを引っ張り出してきて着用する。

・農民にとって、共同体出身以外の人は外国人 (extranjero/-ra) である。同郷人は同国人と同じ名称である (paisano/-na)。パイースは日本語の郷であると同時に国を表す。しかし、出身以外の町からやってくる、それぞれの「～県人・～町民」と呼ばれる。例えば、コパン県人はコパネコ (Copaneco/-ca) であり、ドローレス町の人はドロレーニャ (Doloreño/-ña) である。隣家、集落、町村単位での農地紛争がある時には、ヌアー族のクランのカテゴリーの同等の水準での対立図式同様、同じカテゴリー同士での対立紛争がみられる。

・外国人の代表は米国人であり、米国人の正式名称は合州国人 (estados-unidence) であるが、米国人は圧倒的にグリンゴ／グリンガ (gringo/-ga) と呼ぶ。ただし、正面きって当事者にそう呼ぶことはない。蔑称のニュアンスがあるからだ。グリンゴの語源を聞くと、多くの人は、こう答える：「米国は 19 世紀にはラテンアメリカの国——特にカリブ海側の港湾都市——に軍艦を派遣して占領することが多かった。海兵隊の軍服の色はカーキー色（濃緑色）だ。だからグリーン (green) なヤンキーよ！さっさと去れ (Go!)、だからグリンゴ (green-go) というのさ」という。このエピソードはしばしばよく語られるので、スペイン語に精通しているグリンゴ本人もよく知っていたり、また自己紹介する時に、スペイン語の話者に対して、自己カリチャライズするようにグリンゴ／グリンガと自称しておどけることがある。スペイン語の話者に対しては、その人が仮に心情的反米主義者であっても、大きな弛緩作用をもつことは明らかである。

・[補足説明] ウィキペディア (英語) によると、イベリア半島で 1787 年で発行された書物に「アンダルシアのマラガ地方では、カスティリャ語のアクセントと異なる発音をする外国人をそう (=グリンゴと) 呼び、マドリードでも同じような理由で、アイルランド人をそう呼ぶ」と記載されている。Beatriz Varela, Ethnic Nicknames of Spanish Origin, In *Spanish Loanwords in the English Language: a tendency towards hegemony reversal*. Félix Rodríguez González, ed., p. 143, New York : Mouton de Gruyter, 1996.

・彼ら (メスティーツ) は、小さな町ですら雑貨店やレストランのオーナーとして東洋人を見かけることがある。東洋人の総称は中国人 (chino/-na) と呼ばれる。これはモンゴロイドの特徴の切れ目が有徴性をもつからである。蔑称のニュアンスがあると、縮小辞が付いてチニート／チニータと言われる。しかし、切れ目が可愛い赤ちゃんなどは、偏見なくチニート／チニータと使われることもあるので、両義性があると言ってもよい。東洋人に対しては、グリンゴと違い、通りですれ違い様に、チニート／チニータと聞こえよがしに呟かれる経験をもった人は多いのではないか。また、これもグリンゴの用法と違い、東洋人が「私はチニート／チニータ」と公然と自己カリカチャライズすることは聞いたことがない。興味深いのは、日本人や、韓国人、またたまには台湾人やその他の東洋人が、そう言われると、自分は「～人だ」——例えばソイ・ハポネス (Soy Japonés) ——とムキになって反論することがある。これは、明らかに自分の経験でもあるが、中国人と一緒にしてほしくないという、日本人である自分もつ偏見に由来するものであると思われる。その証拠に、世界の人口比やフィールドで出会う確率からみれば、中国人と思われても当然だからと思うようになると、私は気にならなくなった。しかし、他方で、チニートと思われるがままにされていて、ある日彼らから「お前はチニートのように見えるが、そうじゃないだろう？」と聞かれると、日本人であることの自尊心がくすぐ

られることがある。

・かつて、縫製工場のマキラドーラ（労働集約型の工場ないしは工業団地）に韓国人がたくさんいたグアテマラ市近郊で「お前はコレアノ（韓国人）か？」と聞かれると、中国人としてラベルされるよりも不機嫌な気持ちになる。明らかに、自分をもつ民族的偏見あるいは嫌悪によるものだろう——後で、このことに自覚的になると二重の意味での不快感が募る。ホンジュラス第二の都市、サンペドロスラーで、当地在住の日本人の年配の方に、韓国系マキラドーラの進出と、労働者への過酷な扱いや（性的なものも含めた）虐待という町での「情報」——当然風評やステレオタイプも含まれる——について話され、「あなたたち韓国人に見まぢがわからないようにしなさい」と助言してもらった時も、同様の後ろめたさを感じたことがある。

・他方で、私よりも年配の方で、日帝統治時代の影響により、日本語が流暢なラテンアメリカの在住の台湾人や韓国人に出会ったり、非常によくしてもらおうと、面と向かって堂々とは言えないが——尊敬に関する長幼の念による遠慮や恥ずかしさもあるが——自分たちとは未経験の日帝統治に対して「謝罪の念が起こる」と、協力隊の同僚と話したことがある。

【02：グアテマラのメスティーソの人たち】

・グアテマラに初めて入国したのは、1985-6年ごろで、考古学の発掘研究チームに同行させてもらった時である。首都での博物館の経験のほかに、アティトラン湖の近くの先住民の都市ソロラ市の郊外で、夕刻の小雨のなかランドクルーザーの車窓の中からみえる、ポンチョを着て自動小銃をかまえながら、特殊迷彩をするゲリラ掃討のグアテマラ国軍の兵士の警邏の姿が、高校時代にみたベトナム戦争のドキュメンタリー『ハーツ・アンド・マインズ』（1974）のシーンと重なり非常に不気味に思えたことを今でも覚えている。小兵からなるプラトーンの体格の理由が、メスティーソのそれではなく、先住民の強制徴兵からなることを知るのはさらに後になってからである。

・1986年当時、グアテマラ市内には、まだ国立インディヘニスタ研究所（Instituto Indigenista Nacional, IIN）が、大統領宮殿から数ブロック外れた場所にあった。メキシコでは研究所（INIと単語の順が異なる）と名付けられても、純然たる学術研究所よりも先住民を近代化に誘う開発人類学のエージェンシーであった。しかしながら、グアテマラのINNは、はるかに小さな学術組織であり、粗悪な用紙にタイプ印刷された『グアテマラの先住民（Guatemala Indígena）』という雑誌を細々と発行していた。そこで、私は、メスティーソ、黒人の混血、先住民の研究者と知り合った。部門やセクションの数はもっと多いはずなのに、建物の中は閑散としていた。私は、女性のメスティーソ研究者に、グアテマラで先住民の調査をおこなうには「慎重」にすすめる必要があるように助言されたが、その理由の多くを彼女は語らなかつた。彼女が、その後7年以上もたって、大学の研究機関に移籍してから、ようやく、あの当時、多くの研究員が辞めて調査や研究に就けなかつた理由が、調査活動そのものが国軍の諜報部（G2）の監視対象になっており、実際に誘拐され失踪された者もいるからだと聞かされた。それすらも、郊外の公園のベンチで周囲に私たちの話が聴かれないような環境においてだった。

■メスティーソの子供と両親の図像（スペイン男性とペルー先住民女性：1770年）と、人種の日
のポスター（ファン・ペロン大統領期、アルゼンチン、1947年）

1. A painting of a Spanish man and a Peruvian indigenous woman with Mestizo child, 1770.
2. Afiche argentino de 1947 por el Día de la Raza actualmente conocido como "día de la Diversidad Cultural", correspondiente al primer gobierno de Juan Domingo Perón.



【03：クチュマタン高原の民族間関係】

・1987年暮れからグアテマラ西部ウェウエテナンゴの標高2400メートルのmam系先住民の町に2か月余り過ごした。当時、町にあったのは2つの旅籠屋としか言いようのないホテルだった。ひとつは、ラディーノ（＝メスティーソ、チアパスとグアテマラのマヤ系先住民でよく使われる）、ひとつは、mamの先住民のものだった。前者は、掘立小屋で2畳程度の手製のベッド（というよりも板張りの柵でマットレスが敷いてあり、30センチ四方のテーブルがあり、その上方に刑務所のような30センチ四方のガラスのない板張りの窓があった。しかしながら、先住民のもホテルは、小汚い中庭にドアだけしかない植民地様式の漆喰のセルしかないものだった。先住民のものは部屋を貸すだけで、その大家との関係性が何もない部屋貸しだけのもだった——先住民の客商売の方法だと後からラディーノのホスト家族に揶揄された。ラディーノものは、ホテル家族の長男と次男も自分の部屋として使っているもので、食事も家族と一緒にとれるために、こちらのほうを居場所にした。

・ラディーノの家族は、数家族ありそのほとんどがリネージを辿れるものだった。ホストファミリーの主人は、この町で生まれた男性で、女性は県都ウェウエテナンゴ近くの巡礼地の町出身で婚入してきた人だった。男性はスペイン語とmam語のバイリンガルで、教会の裏の商店の通りで雑貨店を営んでおり、その後、ほどなくして（消石灰で煮た後に水洗いした）トウモロコシを轆いて、トルティージャの原料となるニシュタマルをつくる粉引き装置を導入して、



粉ひき業——鉄製の臼の隙間を調整すると焙煎したコーヒー豆も挽くことができる——も営んでいた。

・ホストファミリーの主人は、先住民に対してはママ語も話し非常にフレンドリーであったが、穏健派のプロテスタント派（Centroamericana）であった。この町は、伝統的なカトリックが長く支配していたが、メリノール教会の神父がやってきた1960年頃から、フォークカトリシズムと深く結びついた宗教＝社会的祭礼組織、例えばカルゴ体系やコフラディーアの制度などが、教会の外に追い出され、民俗的慣習化された。1970年代には、アクション・カトリカの運動の普及が進み、グアテマラ西部高地のカトリック活動は、ますますプロテスタント化の様相を持っていた。（→別表の観光開発に関するタイムテーブル参照）

・この町に到達する前に、私は落合一泰さんの『マヤ：古代から現代へ』岩波グラフィクス、岩波書店、1984年を読んでいた。そこでは、チアパスのマヤ（ツォツィル）とラディーノ民族間関係の陰険な相互関係、より具体的には敵対関係に満ちていることが僅かな記述の中にも窺われた——実際にそのような情景を見事に表象する一葉の写真がある（→このハンドアウトの

最後のページにあります)。また、人類学者フランク・カンシアンのカルゴ体系(教会の組織の中の信徒組織なかで経済的蕩尽をおこないながら政治的威信を上昇させる政治=経済体制)も、また、この地域を調査したマウド・オックスの民族誌に見られる(先史古代から現代にまで連綿と続く)マヤ文化の強烈なフォークソリスズムも皆無のように思えた。

・やがて、それらの慣習や儀礼が地下化して細々と続いていることは分かったが、ほぼ「壊滅状態」にあるのは、私の実際の経験としてある。そのため、この後に、この町で調査する外国人——記憶の範囲では多数の米国人の他に、ドイツ人、メキシコ人、イタリア人などが博士論文を執筆している——が、「文化変容」や「文化的アイデンティティ」の変容について、正面から考えないことは、極めて人類学者として後ろ向きな態度だと私は思った。

・この町のラディーノの勢力の弱さと先住民との関係における比較的有和的關係は、ラディーノの多くが、役所の会計係、電信郵便局員、商店主、教師など、かつてのエスニックな既得権を「民主化」以降失った他に、この町を襲ったゲリラの占拠と、その後のグアテマラ国軍の恐怖による支配のなかで、多くのラディーノがこの町を放棄して去っていったことと、戻ってきた人たちは、私のホストファミリーの主人と同様、この土地に強い愛着をもつ人だからということもあったのではないかと思われる。もっとも、この町から10キロ程、流域沿いに高度を下っていったところにキョウダイ村落があり、そちらの人口比では、ラディーノ割合が多くかつ通婚圏であったので、一時的な避難地として機能してきた可能性もある。

・私がかつとも仲良くなったのは、私よりも10歳年下の先住民の小学校の教師である。彼は結婚したてで、二女のパドリーノにもなった。これは、子供の受洗にあわせてパドリーノ/マドリーナという洗礼親を通して血の繋がらない夫婦同士(家族)が紐帯を確立するというコンパドラスゴという擬制的親族制度である。ホンジュラスのメスティエソ農民の間では、パドリーノは経済的に豊かなドンが選ばれ、コンパドレ関係で結ばれたカップル(家族)は、どちらかというパトロン=クライアントの関係になるのだが、クチュマタンの先住民では、とりあえず、ラディーノがやるような様式であれば誰でもオッケーという感じだったので、びっくりしたことがある。アイハーダ(受洗した赤児)の彼女とは20年近くたって、不法移民になり米国で子持ちになり夫婦ともになり、カリフォルニア州オークランドで再会したことがある。

・この先住民の小学教師は、メリノール修道会が組織した先住民向けの奨学金(beca)のかつての受給生であった。この奨学金は、ラディーノの校長先生が先住民のなかで優秀な先住民の子供たちの父兄に授けるといったものだ。このラディーノ校長先生は、県都ウエウエテナンゴ出身で、その父もまた教育者であり、高地先住民のゲリラ掃討作戦において多大な犠牲者を出した、リオス・モント元大統領(国軍の大佐であり、将軍であり、国会議長であり、また人道に反する罪で訴追された裁判の被告でもある)と同級生で、校長は遠縁にあたる親族でもある。

・私の最初のインフォーマントであった小学校教師は、県都で師範学校に入学し、下宿生活をしてしたが、学校においても、また町においてもラディーノから受ける先住民差別は過酷であったよく述懐していた——私の知っているグアテマラの各地で1960年代中ごろから1980年頃に師範学校——大学に進学するコースをたどらない先住民の中では最終学歴のコース——に入学した先住民の人たちは、ラディーノ教師たちのからの過酷な人種差別を述懐する。特に、仲間同士での先住民言語の会話、正書法から逸脱したミススペル、スペイン語の文法的間違いな

どでは、インディオという誹謗語を常用していて、体罰などを加えたという。そのため、外面的にも内面的にもラディーノ化して、自分の出身村での教育に携わず、別の赴任地を希望したりして——民族衣装が異なるために衣裳はラディーノ化する——、別の先住民グループの地域に派遣されても、ラディーノとして振る舞うようになる。ただし、自らの出身地を隠す者はおらず、その地域の名称から父兄も彼（女性が奨学金の給付対象になるのはその後）が先住民であることを知っている。ラディーノ化した先住民を蔑む先住民のエートスは見られない。

・この町で知り合った幾ばくかのラディーノの人たちに地元の先住民に対する強い嫌悪感をもつことをついぞ見たことがない。それは、彼らが付き合う多くの人たちが具体的な顔をもった先住民たちで、自分たちの生業には不可欠な顧客であり、また時には姻戚関係をもつこともあるからだろう。しかし、多数派の先住民の側には、そのような具体的な関係をもつ機会が少なく、しばしば、カテゴリーとしてのラディーノに対する不信感を表明する人もいる。この町の外での被差別経験を味わった人がほとんどだからである。また、バスの中でラディーノの車掌助手などが、混んでいる車内で、高齢者の先住民を *veni mamacita/ papacita*（こっちこい、おっかあ／おっとう）と軽口まじりで座席を案内するのは、長幼の礼を重んじる先住民には堪え難い侮蔑表現と思われる。

・さて、この町の小学校の校長は、私の最初のインフォーマントを教えた頃——ほとんど赴任直後だったと思う——、先住民が義務教育を受けることに抵抗しており、毎年11月末から12月の休暇中に、翌年の新・小学1年生の登録 (*inscripción*) 時期になる、それぞれの父兄宅を訪問して、入学を進めるのであるが、多くの父兄は、遠方に彼の姿を認めると子供を家屋の目立たないところに隠し「自分の家には小学校に通う年頃の子供はいない」と嘘をつくのだと、よく述懐していた。もちろん、引退して現在は郊外の農園で生活している彼は、現在の先住民の子供への親たちの教育への投資に熱心なことに、隔世の感があることをつけ加えることを忘れない。

・私の最初のインフォーマントの父親は、マウド・オークスの民族誌の中に出てくるが、その写真は小さな裸足のボロ服をまとったタバコをくわえている男児の姿で出ている。その彼はやがて、小さな雑貨店を持つようになり、闇で酒を商うようになり、また少額の金融なども手がけていたようだった。1980年3月頃、ゲリラがこの町で軍事教練をやりはじめた頃——この訓練風景の写真は、アンティグアの CIRMA という研究機関にオリジナルがあるようだが、武器をもった先住民の民族衣装からこの町のものだということが分かる——駐屯していたのだが、ある朝、ミルパ（トウモロコシ畑）の中で銃殺死体で発見されている。この男性は国軍のスパイ（スペイン語の耳=*oreja* で表現される）だとでっち上げ、先住民同士での個人的な怨恨があったものをゲリラ兵（ラディーノと後にリクルートされた先住民の混成である）に告げ口して殺害させたとか、反独裁者、反資本主義のイデオロギーに忠実なゲリラ兵が殺害したという噂があった。この殺害事件と首謀者は、先の校長先生に言わせると、町の人たちの間ですでに分かっており、その状況は、イデオロギー的なものだったという。宗教的儀礼で蒸留酒を大量に消費するものは同時に黒呪術にも精通しており、また酒類の販売で不当利益をあげて、善良な先住民から搾取しているというステレオタイプにぴったりはまる——グリンゴであったマウド・オークスのインフォーマントの家族なら、さもなりなん、という「合理的」な説明……しかし、それは誰に対し何について合理的なのか？

【04：飲酒する先住民——社会問題の原型】

・いずれにせよ、私の友人は教師だが、その年長と年下の男兄弟も、おなじく教師になった——そして3人ともアルコール中毒気味のところがあつた。このアルコール関連で言うと、ラディーノも先住民も、アルコール飲酒をはじめると、適当なところでやめられなく人が多い。また酒癖がものすごく悪く、酔いつぶれて、財布がすっからかんになり道端で寝込むまで飲もうとする。一人で黙々と飲むのではなく、多くは男性同士2人で刺して延々と飲む。その時に、私酔っ払いながらなぜそんなに過度の飲酒をやるのか？とよくある応答が、Para quitar gana あるいは, quitar tristeza と言われる理由づけで、それぞれ「願望や意欲を忘れるため」「悲しみから逃れるため／忘れるため」とも訳せるものだが、私には当初十分に理解できなかった。願望がアルコールを飲みたいということであれば、それを忘れるために飲むのは理不尽だし、悲しみから逃れるためと言いながら、結構泣き上戸が多いからである。アルコール摂取の比較文化論でよく指摘されていることだが、彼らの飲み方は、儀礼的な意味で必要性があるときに飲む場合は、おおっぴらに杯をあげるが、カンティーナ (cantina) という怪しげな非合法のバーや飲料販売所で飲む場合は、衆人に目撃されないようにこそこそ飲み続ける。明らかに飲酒のコンテキストとそれに伴う情動には深い関係があることがわかる。

・また、ラディーノ、先住民を問わず、男性がプロテスタントに改宗する理由の大きな要因は、アル中状態からの精神の解放のようであり、それはプロテスタント各派——カソリックのカリスマティコスという刷新運動派も含めて——飲酒と喫煙を固く禁じているからである。カクチケルの民衆画家にオスカル・ペレン (Oscar Peren) という有名人がいるが、彼の作品の中に、ロバに変身して道端に座りこみ考え込んで (Que pura lata son las traidas) 《なんてこった使い古したクズの空き缶め！》という吹き出しとも、メッセージが描かれている作品がある (私がオスカルと直接交渉して購入したもの)。ロバの姿は涙ぐんでおり、足下に酒瓶が転がり、夕暮れのコマラパの町の遠くの空にコウモリ (sotz) が飛んでゆく情景である。オスカルによると、ソッツは彼女の親族名称であり、彼女自身を表象しているとのことだった。彼も、アル中から脱却するために改宗したとも／改宗したから飲酒から足を洗うことができたとも、両方にとれるニュアンスのことを話していた。プロテスタントへの改宗は、夢見による超自然的体験か、このような実利的なものにあるようだが、当事者にとってはともに真剣な経験である。

【05：ミ・コンパ・ホセ】——チアパスで本物のインディオと邂逅した！

・まだ20歳になったばかりの小学校教師の友人とメキシコ・チアパス州のサン・クリストバル・デ・ラス・カサスにまで旅行を企てたことがある。チノ (中国人=私のこと) の人類学者——先住民で人類学者の綽名をもつ男性がいたがそれは彼の同僚のやはり同じ教師だが博学の者という意味だったらしい——と、国境を越えてメキシコに連れていったということは、この町の人たちにとってもちょっとした事件で「お前がホセ (彼の実名) をメキシコに連れて行ったのか？」ということを経験後何度も聞かれてことがある。

・バスは町から出て三千メートル超のクチュマタン高原台地を横切り、ふたたび千メートルほど下った県都のウェウエテナンゴに到着するのだが、そこに到着する前に、赤いストライプの

スラックスタイプの民族衣裳ははいていたものの、刺繍が綺麗な大きな襟のついた上着を脱いでリックサックに入れて、代わりに人工皮革のジャンパーに着替えた。どうして？と聞くと「インディオに見られたくないから」という。国境を越えて、メキシコ領内に入国しても、チアパス州のコミタンという都市までは、グアテマラの市民証 (cédula civil: 携帯が義務化された身分証明書) で立入が可能だ。しかし、そこから先は、グアテマラ国民であってもパスポートがなくてはならない。案の定、コミタンを超えたところで我々を乗せたプルマンのバスは止められ、メキシコの入国審査局の係官が乗り込んできてパスポートや身分証のチェックを始めた。彼は、顔や服装から怪しげな者のみの身分証をチェックする。私は、図体のでかいチノなので、パスポートをチェックされたが、ホセはスルーされた。まったくどきどき冷や汗ものだったが平静を装い、バスが出発してから、ホセが「ウェウエで上着を着替えてて良かったよ」と述べた。しかし、私は、先住民らしき——入植地であるチアパス低地で働く／移民してきた高地出身の彼らは民族衣裳を着ないものが多い——メキシコ人も身分証を求められてその係官から詰問されていたので、「いやいや君がラディーノよりも色白で先住民ばく見えないからだよ」と感想を述べた。町にいる時にはそう思わなかったのだが、彼の兄弟たちと比較すれば、ホセだけはちょっと顔立ちも多少違い、色白紅顔の青年だったのだ——娘たちはそうは思わなかったが後年生まれた末っ子の息子は父親と同様の色白のハンサム男だった。

・私は、ホセをつれて、サンクリス (デ・ラス・カサスの短縮名称) の様々なところに訪問した、ラカンドン民族のパトロンになっていた、まだ存命中だった Getrude Duby de Blom (1901-1993)——Frans Blom(1893-1963)の未亡人——の Na Bolom 博物館、政庁アユンタメント、サントドミンゴ教会、市場、など。しかし、もっともホセが感動したのが、ツォツィルの町チャムラのカーニバルの祭礼だった。まず、コンビという VW ステーションワゴンを降りて町を見下ろす境界のところにあった写真撮影禁止の立て札。鉄にペイントした小さな立て札には「ここで数年前にアメリカ人が先住民に写真を撮影したために撲殺された。この村では写真を撮影してはならぬ」と書いてあった。そして、広場の中心にあるサン・ファン教会である。この教会の堂内は、ミサの参列者用の長椅子などがなくコンクリートの床ではなく土床——フォーク・カトリシズムの信仰がある伝統的な教会のスタイルで先住民はここで跪くことで大地と触れるという——からなり、ホセは開口一番、「外国人 (=メリノール・ミッション) が来る前の私たちの教会もこうだった！」と言い、その後は「ここには本物のインディオ (puro indio) がいる」「私たちは伝統を捨てたからゲリラや (グアテマラ) 国軍がやってきて、故郷が破壊されたのだ」と興奮気味で話した。それを聞く私 (僕) は、彼をここに連れてきてよかったと思った。

・冷静に考えれば、ホセに伝統的文化主義者になれと無反省的にただ煽っているのではないかということなのだが。ホンジュラスのメスティソ農民のところに2年間暮らしたあとに、ようやくグアテマラの「本物の先住民」を求めてやってきたのに、コフラディアもカルゴ制度などもなく、今だ内戦中であり——和平合意はその9年後である——人びとの姿は暗く、時々やってくるカーキー色の迷彩服をきた軍人には、脱兎のごとく隠れたり、恐怖により顔がひきつる町の人々の生活、民族衣装だけがカラフルな年に一度の万霊節のこれと言って見どころがない競馬がもっとも「カラフルな民俗的祭礼」で有名な町。翌日の死者の日には、ただ墓場にマリンバを持ち込んで、飲んできて花火をあげて、酔いつぶれるだけの先住民の人たち。そんな

生活を垣間見た後だったので、ホセの「本物のインディオ」との邂逅は、自分のことのように嬉しかった——これは見方を変えると私の意識がもつ白人性と類似の「日本人性」に由来するかもしれない。日本人性とは、構造的に優位な立場にいて、その立場から他者やその社会を見て、かつ自分の判断が特別で日本人固有の判断をしているのではないという意識構造のことであるからだ（藤川 2011:164）。

■最初に調査したマムの共同体：政治的暴力の横溢とその《トラウマ》について

1) 年表 (池田 原図)

2) 観光開発に関するタイムテーブル (池田 原図)

【06：私のマム語教師の W 氏】あるいは、ラディーノの肖像

・私のマム語の先生である W 氏についてはもう 10 年以上のつきあいがある。そして、さまざまなお思い出がある。いまでも FaceBook で時々、動画で通信し合って消息を確かめる大の友人である。

・彼の出身は、グアテマラ西部高地のサン・マルコス県にある比較的著名なインディアン・タウンである。ジョン・ホーキンスによる同県の都市部のインディアン・タウンのサンペドロ・サカテペケスの民族誌『倒立したイメージ：ポストコロニアル・グアテマラの文化・エスニシティ・家族の意味について』（1984）に、都市部のそれと村落部のその比較対象に出てくる後者の事例として簡単な調査がなされている。

・長年の彼とのつき合いによって私が推測できる範囲で、W 氏にとって「支配者を可視化する名指し」のうち、もっとも大きいものは、過去の経験と現在の経験の 2 つある。ひとつは、内戦時代に、父について靴や衣類の行商で回っている時に会った、グアテマラ国軍の凶暴な士官と、機敏に農民から必要なものを調達するゲリラ兵士の司令官の対照的な姿である。ともにラディーノの男性である。他方、現代のものは、自分が現在働いている小学校の校長でラディーノ女性である。

・内戦期においても、この父子は海岸部の比較的ラディーノが多く住む海岸地帯——コスター——の諸都市を行商で回っていた。多くの国軍の軍人は、夜になると、カンティーナと呼ばれる立ち飲み屋に現れて酒を飲んでたという。昼間は雑貨店だが、夜になると酒を提供するカンティーナになることもある。飲んだ勢いなのか、近隣を歩いている行商人を捉まえて持ち物を見せろと命じて、荷物の荷解きを命じる。これは、商品を購入するためよりも、ゲリラの協力者ではないかという「軍事的チェック」のためだと称されるために、行商人にはそれを頑なに拒むことはできない。軍人に刃向かうことは、イヌネコのようにその場で射殺される危険性すらある。もちろん、夜に行商人が不用意にある機会は少ないが、必要に駆られて移動している時に、それも不幸なことに酔った軍人の士官に遭遇することがある。W 氏が遭遇したのは、たまさか、父の用事で出かけた雑貨屋で出会った酔漢の軍人である。ちょうど腹に差したピストルを出して先住民の行商人を脅す状況に遭遇した。その理不尽、その凶暴さに、少年時代の W 氏は非常な恐怖を怖れた。行商用の荷物とともに、シェラ・マドレ山系の村々を訪れた時に、バスの窓から道端に散らばる農民の屍体をみたときに、W 氏は、ゲリラではなくきつと国軍の

兵士が殺したに違いと思ったそうだ。それは、農村部で稀にみたゲリラ兵たちの機敏な姿と繋がるからである。

・W氏がみた、ゲリラ兵の小隊のメンバーは、男女の兵士たちであった。彼らは長い間、シャワーを浴びていないようで、汗と垢の蒸せた匂いがするので、彼らのことを「山のからやってくる人」と呼んでいた。彼がみた、ゲリラたちは、なにか道で食糧などを農民から調達しているようで、きちんと農民からの言い値で購入しているようだった。その司令官は、体格もよく、非常にきびきびと動き、また、グアテマラの国軍の兵士がいかに残虐に農民を犠牲にしているのかを雄弁に説明していたという。しかし、食糧の購入が終わると、彼らは同僚の兵士たちを促して、短期間に身支度をして重いリュックサックを担いで、また山の中に戻っていたという。

・そして、現在の（数年前だが）ラディーノ女性は、彼の上司であり、彼が勤めている小学校の校長である。時にドーニャと敬称をつけて呼んだり、その名前だけで呼んだりするような、アンビバレントな価値付けを彼の中にもみることがある。彼によると、多くのラディーノないしは、ラディーノ化した元インディヘナ——彼によると後者は顔の身体的特徴でわかるのだそうだが——が、インディヘナに対して、意図的に公衆の面前で露骨に表現する、正真正銘の人種差別主義者＝ラシスタ（racista）に対して、彼女は無知にもとづくラシスタだという。人種主義者に対するこのような微細な話は、私と彼との対話の中で形成されてきたふしがある。私は、彼からの学ぶ時に、しばしば、先住民のプライドや人種差別の問題について議論してきたからだ。そのような会話を重ねるたびに、今度は彼自身が、これまで様々にであった差別をうけた経験——もちろん幼少時代から現在まで多種多様な局面において——を語ってくれた。また、そのことについて、私に意見を求めたり、反論したり同意したりしてきた。このような対話は、過去の遠い経験のみならず、現在進行中の出来事でも語られる。その中でもっともよく語られるのが、隣のラシスタたる、上司の校長である。しかし、彼も当初は、授業の中で、1996年の和平合意の中で先住民の権利が認められてきたことや、学校教育のなかで、先住民文化に言及することの必要性が説かれたカリキュラム改訂の折りには、自分が先住民であることで、グアテマラの先住民の代弁者のように振る舞うことができることを知り、少しずつ彼女を啓蒙してきたという感触も持っているようだ。そのような、状況に応じた彼女の反応を、ムカツク時でも、わが意を得たりという気持ちになったときにも、つねにW氏は興味深く話してくれた。

（書かれなかった物語）

【0x：村落政治のなかの先住民】

【0X：モンハ・グリーンガ】

■エピローグ：7つのアフォリズム

1) キシンはハチャキュンより土と腐った木から創られた。ハチャキュンはキシンの女も創り与えた。キシンは樹木の茸をトルティージャのように食べ、ウジ虫をフリーホーレスのように食べる。彼の姿は西洋人風で悪臭を放つ蔓性の花を帽子として被っている(Robert Bruce et al. 1971:14-15)——Los Lacandonés: Cosmovisión Maya. Instituto Nacional de Antropología e Historia, Ciudad de México.

2) 幼き日／アイヌアイヌとあざけられしを／ふいに思いて憤る夜

レジの中ひるまず生きるを支えとし／吾宿命を恨む事／多き

アイヌでふ概念誤解多くあり／今に生たし／誇りの道に

マイク持一人たはむる日本人／ピエロの如し／アイヌ愛好師

——江口カナメ歌集『アウタリ』p.113（「われはアイヌ（続）」）、新泉社、1974年

3) 「帯広出身の20代のアイヌ民族酒井美直氏は、現在アイヌ民族として生きることを高らかに謳い上げ、アイヌ民族の若者を組織して様々な社会活動に取り組んでいる。そんな彼女が中学、高校の時、教科書をもらうと、自宅に帰ってすぐ社会科の教科書を手に取り、緊張しながらアイヌ民族に関する記述を探したという。そしてその部分を授業で扱う時期がくると、授業進度を予測して学校を休んだという」2008年11月29日に開催された「神奈川県立地球市民かながわプラザ主催セミナー「世界の先住民族、そしてアイヌ民族」の講演より（中山 2012:296）

4) 「アイヌ民族について学習することは必要で、あると思うし、教科書に掲載されることも歓迎する。しかしそれを教える教師がアイヌ民族のことを語る力がなければアイヌ民族の児童生徒は私のような感覚に陥るだろう」——中山京子によるインタビュー2008年11月29日（中山 2012:296）『先住民学習とポストコロニアル人類学』御茶の水書房。

5) 「僕らの集会に来るシャモを、逆に僕の方からも観察させてもらっています。そうすると、「アイヌに同情することによって、善人としての自己存在をアピールする場」を見つけたと喜んでるシャモ（和人）が多いように感じます。アイヌが語る普通の生活話は退屈そうな顔をしてるくせに、差別話になると目が生き生きして身を乗り出す。そのシャモが何かすごいことをやってる満足感を得るためには、できるだけアイヌの生活や歴史は悲惨な方がやりがいが出てくるらしい。アイヌに対しては、いつまでも「自然保護」を叫ばせて「革命」を目指すことを押しつける。こんな人達に「共に生きよう」みたいに言われると気持ち悪くなってきます [大谷 1997:44] ——大谷洋一「道外に住むアイヌとして」『公開講座・北海道文化論 13：アイヌ文化の現在』（札幌学院大学人文学部編）札幌学院大学生生活共同組合。引用は [関口 2007:9-10]

6) 「M氏の奥さんの曾祖父はメキシコからやってきてモモステナンゴの先住民の曾祖母と結婚してここに住んだという。彼女の母親はインディヘナに対する差別ゆえに伝統的なウィピルを着ることを辞めてしまい、彼女もそのように育った。そのため彼女はずっとラディノの衣装を着ている——このあたりの表現は難しい。というのは彼女はしばしばS氏（同行した韓国出身の人類学者）の質問に答えて「インディヘナは自分のアイデンティティを未だ持ったことがない」と言いきり、伝統的な祭礼やカトリックの信仰が先住民の「アイデンティティ」を表象するもの、あるいは一部を構成するものと（研究者が捉えるような）理解をしていないからである、と述べた」（1999年7月29日のノートより：キチエ県モモステナンゴにて）

7) 「「諸文化」は肖像画を描くためにひとところにじっとはしていない。肖像画を描くために文化を静止させようとする企ては、いつも単純化と排除、当座の焦点の選択、特別な自己—他者関係の構築、力関係の強要や駆け引きという問題を引き起こす」（クリフォード 1996:17）

「序論：部分的真実」『文化を書く』クリフォードとマーカス編、1986=1996



友好のしるしにビールを一緒に飲むインディオ(左)とメスティソ(右).
16世紀以来, 両者の関係は常に緊張をはらんできた.(サンタ・マルタ村)

落合一泰『マヤ：古代から現代へ』p.61, 岩波書店, 1984年



Mitzub'ixi Quq Chi'j tuj Paxil, Chinab'jul, Ixim Tx'otx', diciembre 1987.